

○甲状腺の病気について

甲状腺は首の中央にある親指の頭2つほどの大きさの蝶のような形の臓器で、体全体を元気にする甲状腺ホルモンを作ります。

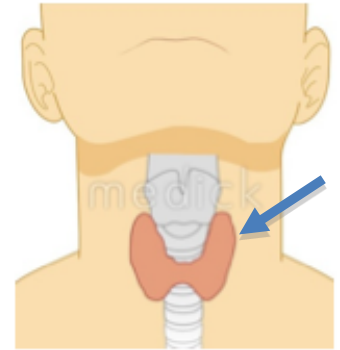
その他に、甲状腺は良性の結節（腫れ物）ができやすい臓器でもあります。

このため甲状腺の病気は、

甲状腺のホルモン過剰や不足でおこる病気、

甲状腺の腫れ物（結節）、

があり、この両者が合併することもあります。



○甲状腺ホルモンが増加する病気

バセドウ病

“目が飛び出る病気”として有名ですが、この眼球突出の合併は稀です。

血液中に甲状腺の働きを刺激するタンパク（甲状腺刺激抗体）ができ、甲状腺ホルモンが増加します。

甲状腺ホルモンは体全体の働きを活発にしますので、汗が多くなる、微熱が出る、鼓動が激しくなる、手が震える、いらいらして落ち着かない、不眠、下痢、女性では月経過多や不妊、流産の原因ともなります。

学童期に発症した場合、落ち着いて勉強に集中できないため学業成績低下をきたすこともあります。

無治療で長期に放置した場合、不整脈による心不全をおこしたり、感染やストレスが誘因となり一度発症すると大変死亡率の高い甲状腺クリーゼという重篤な合併症を起こすこともあります。

バセドウ病の治療

血液検査で診断します。シンチグラフィーという放射線検査を行う場合もあります。

治療は甲状腺の働きを抑える薬（抗甲状腺薬）の内服が一般的です。

この薬は、蕁麻疹がでやすかったり、大量に使用した場合白血球減少症をおこすことがあり、現在では服薬量を1日3錠以内に抑えヨード剤を併用することが多くなっています。

また、治療開始2~3カ月間に副作用が出やすいため、2週間ごとに血液検査で白血球の数を確認します。内服薬の治療で難渋する場合は放射性ヨードカプセルを飲むを治療に変更することもあります。この治療でのがんの発生（発癌性）の増加はなく、安全な治療です。

手術を行うこともあります。この場合甲状腺をすべて取り去るため、術後甲状腺ホルモンを生涯服用する必要があります。

亜急性甲状腺炎

甲状腺に激しい炎症が起こり甲状腺が痛くなり、固く腫れます。風邪と間違えられることがよくあります。

ウイルス感染が原因と考えられていますが、詳しい原因はわかっていません。

甲状腺を圧迫すると強い痛みがあります。激しい炎症で甲状腺が壊れ、甲状腺内のホルモンが一気に血液中に流れ出るため、バセドウ病と同様の症状を示します。

診断は甲状腺の痛みの症状や血液検査、甲状腺超音波検査で診断します。

治療はステロイドや抗炎症薬（鎮痛剤）を短期間使用します。炎症が収まった後、甲状腺ホルモンが不足する甲状腺機能低下症に陥ることがあり、一定期間甲状腺ホルモンを服用する場合があります。

稀な甲状腺ホルモンが増加する病気

甲状腺に甲状腺ホルモンを作る結節が生じたり、脳の一部に甲状腺の働きを調整する甲状腺刺激ホルモンを多くつくる結節が生じる場合がありますが、いずれも稀な病気です。

○甲状腺ホルモンが低下する病気

慢性甲状腺炎（橋本病）

血液中に甲状腺の働きを抑える甲状腺自己抗体（抗 TPO 抗体、抗 Tg 抗体）が生じ、甲状腺ホルモンが減少したり、甲状腺が腫れたりする病気です。特に女性に多く、女性全体の 10 人に一人がこの病気を持つのではないかとされています。しかし治療が必要な方は、さらにその中の 10 人に一人くらいです。

甲状腺ホルモンが低下した場合、体がだるい、体温が下がる、脈拍が遅い、声が低い、体がむくむ、物忘れが多くなった、などの元気がなくなったような症状が出ます。普段甲状腺ホルモンが正常な橋本病の患者さんでも、海藻類を多く食べすぎた場合、女性では妊娠中に甲状腺ホルモンが低下することがあります。診断は血液検査で行います。甲状腺ホルモンが正常な場合は治療の必要はありませんが、甲状腺ホルモンが不足している場合は甲状腺ホルモン薬を服用します。

橋本病の方の甲状腺が急に大きくなった場合は、すぐに医療機関を受診してください。急速に甲状腺ホルモンが低下したり、甲状腺に悪性リンパ腫という癌が生じる場合が稀にあります。

その他の甲状腺ホルモンが不足する病気

生まれながら甲状腺が小さい、手術で甲状腺が切除された後、首の放射線治療の後、脳からの甲状腺刺激ホルモンが少ない、甲状腺ホルモンの作用が弱い場合などがありますが、いずれも稀な異常です。